

書評

諸 点淑『植民地近代という経験 ——植民地朝鮮と日本近代仏教——』

藤 井 健 志

I 重層的な問題意識

本書は、その章構成（第一章：日本仏教の社会事業の展開、第二章：植民地朝鮮における真宗大谷派の社会事業、第三章：植民地朝鮮における浄土宗の社会事業）を見ると、植民地期の朝鮮半島で行われた日本仏教による社会事業の研究書であるような印象を受ける。そのこと自体は間違っていないのだが、しかし、何重かの問題意識や視点が入れ子のような構造で展開されており、見かけよりも複雑な構成になっている。

評者なりの整理をすれば、著者の問題意識は、第一に朝鮮近代史に向けられた研究者たちの歴史認識の再検討にある。著者は日本と韓国の研究者の歴史認識が、ともに自国中心で他者不在のものになっており、それを克服する必要があると考えている。そのためには、「相互の歴史、つまり、「忘却」し、これまでみえてこなかった歴史を再生させ、自覚する必要がある」（6頁）というのが、著者の立場である。相互関係が重視される所以である。

この立場から、著者は仏教を研究対象として選んだ。著者はこの時期の「朝鮮仏教」が、「日本仏教」から正負の影響を受けて自己を形成するとともに、「日本仏教」の方も朝鮮半島に進出することで、それ自身の近代化を進めていったと考えており、そこに相互関係があったと見ているからである。こうした相互関係を取り上げるのは、第一の問題意識から導かれた結果だが、同時にこの仏教のとらえ方自体が、著者の第二の問題意識を構成している。日本の仏教は一方的に朝鮮半島の仏教に影響を与えただけでなく、朝鮮半島での活動を経験することで、自らの「日本仏教」という概念を形成していったというのである。こうした視点からの近代仏教研究は、これまでそれほど多くない。この対象のとらえ方は、

単に「事実」や先行研究に基づいたというよりは、著者自身の「日本仏教」や「朝鮮仏教」についてのこれまでの研究に基づいた問題意識に由来しており、本書が提供する重要な視点である。

このような問題意識・視点から、植民地期の朝鮮半島で行われた日本の仏教教団の社会事業が検討される。著者は近代日本における社会事業を「日本型社会事業」と呼んでおり、基本的には国家における「良民の育成」と深く関わっていたとする（たとえば74頁）。このような社会事業の性格は、植民地において増幅され、より暴力性を帯びたものとなる。こうした社会事業のとらえ方を、著者の第三の問題意識と呼んでおこう。

そして全体を通底しているのが「近代」の問題である。韓国の「近代史」をどのようにとらえるべきか、朝鮮半島に入ってきた「日本仏教」はどのような「近代」を携えており、それを受け入れる朝鮮人は、そこにどのような「近代」を期待したのか。また植民地における社会事業は、どのような「近代性」を帯びていたのか。こうした「近代化」「近代性」の問題が、著者の根底にある第四の問題意識である。

著者の近代のとらえ方は、「植民地的近代」として、近年の朝鮮史研究の中で重視されるようになったとらえ方と関わっている（本書15頁および駒込武『世界史のなかの台湾植民地支配——台南長老教中学校からの視座』（岩波書店、2015年）、15頁）。植民地支配者の暴力と被支配者の主体性とを、どのように関連づけてとらえるかという問題意識である。歴史の中で、「近代」はさまざまにイメージされ導入されるが、異なるイメージはぶつかりあい、修正されたり、抑圧されたり、転移されたりする。この分析においては、そこにどのようなイメージを読み取っていくかという言説分析が重要になる。言説分析を通して、植民地特有の近代をとらえようとするのが、第四の問題意識から導き出された視点である。

本書の根底には、このような四つの問題意識が重層的に存在しているのだが、それぞれが1冊の研究書になりうるほどの重要なテーマである。それを一つの研究書にまとめたため、論点がやや拡散し、統合された結論を引き出しにくい構成になっていると、

評者は考える。しかし、だからこそ、本書はさまざまな読み方を可能にしている。そこで以下では、まず著者が強い関心をもっていると思われる社会事業について、次いで評者が関心をもっている「日本仏教」の問題について取り上げてみたい。

Ⅱ 社会事業と「植民地的近代」

著者は上に述べた問題意識を検討する素材として、1870年代から1930年代に朝鮮半島で実施された日本仏教の社会事業を取り上げている。対象は主として教育事業で、真宗大谷派の向上会館と浄土宗の和光教園を重点的に扱っている。

この部分を著者の第三の問題意識に即して見ていくと、日本仏教は「三・一運動によって動揺した植民地支配を安定化・正当化する合理的装置として」社会事業を本格的に展開していく（324頁）という考え方に向かっていく。こうした理解自体は、従来もしばしば行われてきたものである。しかし一方で著者は、このような先行研究を「従来、植民地における日本仏教の諸活動は日本帝国のアジア侵略への「尖兵」として断罪され、描かれてきた」（46頁）と批判的に見ている。それでは、著者が本書で新しく付け加えた論点は何だろうか。

重要なことは、著者が向上会館における罷業（1923年に起きる。175頁以降）や、和光教園の同盟休学（1924年に起きる。304頁以降）に注目している点である。ともに日本仏教が設立した教育機関で学んでいる朝鮮人生徒の、学校に対する抗議活動である。

植民地支配に協力するために設けられたと言える教育施設は、しかしその意図とは別に、朝鮮人生徒たちに、学校への抗議活動という社会運動を引き起こすことのできる公共空間を提供したのである。日本の仏教教団側が、植民地支配への協力という近代性を意識して作り上げたものが、「植民地の朝鮮人にとって、「近代」的主体形成の空間として機能したといえる」と、著者は述べている（181頁）。このことは駒込武が前掲書において述べている植民地の公共性の問題ともよく似ている（同書15頁および397頁以降）。この部分は、本書の著者の第四の問題意識にも直結しており、「植民地的近代」の姿、「近

代」のとらえ方のぶつかりあいが見られるきわめて興味深い部分である。それとともに、従来の仏教教団による社会事業を対象とした研究とも、一線を画している部分である。

この点に関する注目は高く評価したいが、しかし、本書においてこの部分が詳細に追究されていないのは残念である。もっとも著者は、以前に「植民地朝鮮における日本仏教の社会事業——「植民地公共性」を手がかりとして——」（磯前順一＋尹海東編著『植民地朝鮮と宗教——帝国史・国家神道・固有神道』三元社、2013年所収）という論文において、この問題をやや詳しく論じている。とは言え、そこでも論じ残されていることは多い。朝鮮人生徒たちの活動は、最終的には抑圧、懐柔されていくのだが、そこで形成された主体が、その後どのように植民地支配と向き合っていくのか、あるいは日本仏教教団とどのように対峙していくのか、また日本人仏教者はこの活動に何を見たのか、そこからどのような影響を受けたのかといったことは、著者の問題意識からすると、もっと追究すべきだったと思う。

Ⅲ 「日本仏教」の誕生の瞬間は？

さらにこの問題を、評者の関心に引き付けて考えてみると、そもそも植民地支配に協力的な「日本仏教」は、どのように生まれたのだろうか。この点に関して、「日本仏教」という概念が、朝鮮半島での経験に基づいて、生まれてくるという著者の考え方は、大変優れていると思う（第二の問題意識）。もちろん近代初頭の日本仏教の経験を、朝鮮半島だけに限るわけにはいかず、西洋および中国（清）との関係を考えなければならないのは言うまでもない。「日本仏教」という自己認識は、複合的に形成されていったのだが、その一環としての朝鮮半島での経験は、もっと注目されてよいと思う。

本書が社会事業、特に教育事業という分析対象を設定したのは、教育が「近代」や「文明」を象徴するものとして、近代初期の朝鮮人に受け入れられていたためだろう。教育事業を朝鮮半島で始めた日本の仏教教団は、当時の朝鮮人から、まず「近代文明をもたらすもの」として受けとめられ、逆にそれによって日本の仏教教団は、「自らの宗教が近代宗教

的なものである」という認識が可能になった（119頁）という。近代初期の日本仏教が、朝鮮を文明化するということに一種の使命感をもっていたことは、これまでも指摘されているが、相互関係や、それを通しての「日本仏教」という概念そのものの創立については論じられてこなかった。

評者はかつて日本仏教のアジアへの進出が、日本のナショナリズムと結びついたことに関連し、ある日本人仏教僧に触れて、その意識の中では「日本仏教の正統性という宗教の問題」と、「国家の先進性という世俗の問題」が混在していると述べたことがある（拙稿「仏教者の海外進出」『新アジア仏教史14 近代国家と仏教』佼成出版社、2011年）。評者は、戦前の日本仏教関係者は、しばしば日本という国家が近代化と世界進出（アジアでの植民地侵略も含む）によって得た政治的優位を、日本仏教の価値の高さを裏づけるものとして考えていたと理解している。彼らは特に東アジアにおいて、日本がいち早く近代化を進めたことが、日本仏教が優越していることの証しだと考えていたのである。こうしたある種の混同が、なぜ、どのような過程で生まれたのかということについては、従来、日本仏教と国家との結びつきという大雑把な回答しか与えられてこなかった。

本書は、このことについて、第二の問題意識のところで述べたように、朝鮮半島における日本人僧侶と朝鮮人との間の相互関係が関わっていた可能性を示唆している。日本人僧侶の朝鮮人に対する一方的な侮蔑というよりも、「近代」「文明」という概念を介しての相互のやり取りの中で、ナショナリズムと宗教性が混在した優位の意識が生まれてきたのかもしれない。本書の次の指摘は非常に重要である。「「近代化」という側面からとらえれば、植民地となる朝鮮における日本仏教の「近代化」への試みは、日本側においては「国家」と結びついた近代性を含むしたものであり、朝鮮側においては、自身たちを開化に向かわせる「文明」という近代性として受け入れられるといった、いわばその重なり合いのうちに行われたものであった」（203頁）。自分たちは東アジアで最も進んだ近代的宗教だという、ある意味で奇妙な日本仏教側の優位の意識（近代性は、宗教

の価値の高さを必ずしも保証しない）は、日本人僧侶と朝鮮人僧侶の相互関係の中で誕生したのかもしれない。

著者のこうした示唆は、近代仏教研究においては、前述のように研究成果も少なく、非常に重要である。ただし、ここでも残念なのだが、この点を詳細に明らかにするための分析を本書は欠いている。取り上げられる対象が、少し後の時代の向上会館や和光教園の方に移っていくからである。1870年代～80年代の教育事業の事例と、そこにおける日本人、朝鮮人の相互関係に分析を収斂させていれば、ナショナリズムと結びついた「日本仏教」が誕生する瞬間を見出せたかもしれない。そうすれば、「相互の歴史、つまり、「忘却」し、これまでみえてこなかった歴史」（6頁）を浮かび上がらせるという第一の問題意識にも、より深く応じることができたのではなかろうか。近代初頭の中国（清）における日本の仏教者の経験をていねいに取り上げた陳継東『小栗栖香頂の清末中国体験——近代日中仏教交流の開端——』（山喜房佛書林、2016年）のような研究が望まれる。

いずれにしても、日本国内における「宗教」という概念や、「仏教」という概念の成立という段階を経て、日本仏教は朝鮮半島に向かったわけではない。概念の成立の過程と、日本仏教の朝鮮布教の過程は、並行しており、複雑な関係があったはずである。さらにそこに朝鮮半島内における「宗教」という概念や、「仏教」という概念の成立が重なってくる。しかもそこには近代的な国民国家に付随する「文化」や「民族」の概念の問題が加わってくる。植民地支配は明らかに暴力を伴うものであるが、上のような諸概念の成立を、日本人と朝鮮人との相互関係を前提として分析するということは、その暴力の質を見きわめる点でも、重要な課題であると思う。本書はその端緒を与えてくれたものと、評者は理解している。

（法蔵館、2018年6月刊、A5判、347頁、7500円）